

誰にも奪われることのない 喜びに生きる

ヨハネ16章16～24節
2021年3月14日
松田 基子 師

受難節の第4主日を迎えました。イエス様が十字架にお架かりなる時が迫ってきました。神の御子のイエス様が、何故、人類史上最も残酷な十字架に架かれなければならなかったのでしょうか。そこには、神様が**人類を永遠の滅びから救おうとされた御心が秘められて**いました。

イエス様は父なる神様の人類救済の御計画に、同じひとつ心をもって、人の子となり、御自身を差し出し続けて来られました。正しく完全であられる神様は、如何に人類を愛しておられると言っても、人類の罪をうやむやにする事は出来ません。それでは神様の正義は成り立ちません。そこで、その罪を償う事が出来ない人類のために、人類を限りなく愛された神様は、御子と共に、神様の側で、犠牲を負う覚悟をされたのです。それは神の御子が全人類の価値に優る、神の子の価を差し出し、その身に全人類の罪を負い、身代わりとなって十字架に架かり、人類の罪を償う事によって、人類に救いの道を開くというものでした。

この様な神様の深い御心は、イエス様以外に誰も分かりませんでした。イエス様はその時が身近に迫っていることをご存知でした。一方、弟子たちはその事を知りません。イエス様は最後の晩餐の席上、弟子たちがイエス様の十字架という危機に直面した時に、彼らが御自身に躓(つまづ)かないようにと、その事が起こる前に、これからどんなことが起こるのか、その事をお話になりました。

最期の晩餐の席上、イエス様がイスカリオテのユダに、パン切れをお渡しになると、ヨハネ13章30節に、
「ユダはパン切れを受け取ると、すぐ出て

行った。夜であった。」

と記されています。彼は宗教指導者達のイエス様捕縛の手先となるために出て行ったのです。敵対者達はやがてイエス様を十字架につけるために、捕縛にやって来るでしょう。イエス様はそれで、なにも慌てておられる訳ではありません。

イエス様は唯々、弟子たちの事を心配しておられました。彼らがイエス様の十字架に躓いて、信仰をなくさないように、また、神様がイエス様の十字架と復活に依って、開かれる新しい世界の担い手となるために、それを可能にして下さる聖霊について語られました。そして、16章7節で、
「**実を言うと、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。私が去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところへ送る。その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと、義についてとは、わたしが父の許に行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること、(つまり、十字架の意味)また、裁きについてとは、この世の支配者が断罪されることである。**」

と教えられました。

イエス様は御自身の、
『捕縛、裁判、十字架の処刑、死、復活、弟子たちとの再会、昇天、聖霊降臨』
という父なる神様の御計画が、一つひとつ必ず成って行く事を確信して、弟子たちに、
『ただ神様に信頼し、イエス様を信じて、
苦しみを乗り越えて行くように』
語られました。

しかし、まだ実際に、そのことに直面していない弟子たちは、イエス様が語られたことを理解出来ませんでした。彼らは、
ヨハネ16章17節、18節で、

「弟子たちのある者は互いに言った。
『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、

わたしを見るようになる。』

とか、

『父のもとに行く』

とか、言っておられるのは、何のことだろう。」

「また言った、

『しばらくすると』

と言っておられるのは、何のことだろう。

何を話しておられるのか分からない。」

と言っています。

弟子たちの心は、民衆と同じ様に、

『過越祭を祝うために、多くの人が、エルサレムに集まって来ている今、ここでイエス様にメシアとしての大きな力を表して欲しい。』

その気持ちでいっぱいでした。それなのに、

『父のもとに行くとか、見えなくなる。

見えるようになる。』

などとそんな謎めいた事を言われても、理解する事が出来ません。そんな弟子たちの心を一番よく知っておられたのは、イエス様です。

19節に、

「イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。

『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる。』

と、わたしが言ったことについて、論じ合っているのか。」

と尋ねられました。弟子たちとイエス様の食い違い、それはいつも、弟子たちはイエス様の言葉面、その表面だけを聞いて、自分達の考えを議論し合うだけでした。それに対して、イエス様は、言葉の奥に、神様の深い御心を込めて語られました。弟子たちがイエス様の言葉を理解出来ないのは、その神様の深い御心に思い及ばなかったからです。その弟子たちが、イエス様の言葉が分かるようになるためには、

『イエス様の十字架に直面し、苦しみ、悲しみ、嘆き、命の危険を潜って後、聖霊降臨に依って、聖霊の助けと、導きが与えられなければなりませんでした。』

イエス様はそんな弟子たちに対して、詳しく論じている時間は、もう、ありませんでした。彼らが直面していく現実をはっきりと示されました。20節に、

「はっきり言っておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなた方は悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。」

と言われました。

弟子たちはイエス様と、3年有余寝食を共にし、イエス様が神様の愛を表され、神様に愛され、数々の奇跡を行われたのを、目の当たりにして来ました。彼らはイエス様がメシア、救い主であることを信じていました。しかし、彼らが信じるメシアは、奇跡を起こす、力あるメシアでした。ところがこの後、イエス様はゲッセマネの園で、捕縛に来た敵対者達に、力を奮われる事も無く、あっけなく捕らえられて行かれるのです。そして信仰的屈辱である、ローマ人の手に渡され、裁判に懸けられて鞭打たれ、政治犯や極悪人が受ける残酷極まりなき、十字架に架けられるのです。弟子たちはイエス様を、メシア救い主と信じているだけに、イエス様が力を奮って敵対者達を屈服させられないことに失望します。それと同時に、追従者としての身の危険を感じて、彼らは失意動転し、悲嘆にくれるのです。弟子たち自身が、予想もしなかった状態に陥るのです。

そんなイエス様と弟子たちを見て、サタンに支配されているこの世の人々、イエス様に敵対する人々は、自分達の思い通りになった事を喜ぶのです。自分達が**サタンの支配の儘**に、神様に**敵対して居る**と言うことに**気付かない**で、罪と悪の成功を喜ぶのです。しかし、神様の真理は、必ず明らかにされます。弟子たちの悲しみ、苦しみは喜びに変わるのです。その悲しみや苦しみは、それがイエス様に依る悲しみ、苦しみだからです。それは人間の我欲から出た、願いが打ち砕かれたと言う性質の悲しみ、苦しみではないからです。イエス様が**神の御子の力**をもっておられながら、**力を使われることなく、敵対者の成すがままに、十字架に身を委ねら**

れるのは、人類の罪を償うためであり、そこに、人類に、救いの道が開かれる、新しい世界を開くためでした。

滅びに向かう人間の運命が救われるという、人類最高の喜びが与えられるためでした。

この喜びを何に喩えたらよいのでしょうか。

イエス様は21節から、

「女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。」

と言われました。女性は子どもを宿しますと、子どもの誕生を待ち焦がれるものです。そこには子どもとの新しい世界が待っていて、夢や希望が広がって行きます。でも、そのような喜びの世界を迎えるためには、出産という苦痛を乗り越えなければ、成りません。母親だけではなく、赤ん坊も、母親の狭い産道を通らなければならないと言う、命がけの苦しみを通して、この世界に誕生します。そうしなければ母親の胸に抱かれる新しい世界に生きることは出来ません。苦しみを通ることなくして、心の底から溢れ出る喜びは得られないのです。

ところで、子どもが誕生し、その子を胸に抱くと、母親は出産の苦しみのことは、赤ん坊が存在する喜びに打ち消されて忘れてしまいます。そのように、イエス様は御自身が十字架に架かれる事によって、人類の罪の贖いが成立し、イエス様を信じる者に、永遠の命が与えられる喜びは、

『弟子たちにとって、これからの悲しみ、苦しみを癒して余りある喜びに変えられるものとなる。』

と言われました。

パウロはこの大きな恵みについて、コロサイ人への手紙の、1章18節で、

「御子は全ての者よりも先におられ、全ての者は御子によって支えられています。また、御子はその体である教会の頭です。御子

は初めの者、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、全てのことに於いて、第1の者となられたのです。」

と言っています。パウロはイエス様の復活を、「最初に生まれた方」

と表現しています。つまり、イエス様に依る全く新しい世界がもたらされたことを言っているのです。しかし、それはイエス様にとっても、弟子たちにとっても、苦しみを通らなければ成りませんでした。

イエス様は弟子たちの苦しみどころではない、極限の苦しみを負わなければ成りませんでした。それなのにイエス様は、弟子たちのことを心配して、22節に、

「ところで、今はあなたがたも悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。」

と励まされました。

一方弟子たちは、イエス様から、

「あなたがたは泣いて悲嘆に暮れる。」

と言われて、

『どんな苦しみに襲われるのだろうか。』

と不安で一杯になり、悲しみに襲われていました。彼らの一番の不安は、イエス様が、

「あなた方は、わたしを見なくなる」

と言われたことです。つまり、

『イエス様が自分達を置いて、どこかへ行ってしまわれる』

ことでした。しかし、イエス様は、

「わたしは再びあなた方と会う。」

と約束して下さいました。

イエス様は肉体の死を、完全に死なれて、赤ん坊が生まれる様に、新しい霊の体になって復活されるのです。永遠の世界に生まれられるのです。復活に依る永遠の世界、そこは、時間にも、場所にも、制約される事の無い世界です。イエス様は復活して、40日の間、弟子たちのために彼らに現れ、神の国のことについて、また、弟子達がこれから、述べ伝えていくべきこと

を教えられます。その事は、弟子たちに、再会の喜びと、イエス様が**真のメシアである確信**を与えます。その上でイエス様は昇天されますが、聖霊降臨によって、今度は聖霊を通して、信じる全ての人と共にいて、力づけ、信仰を守り、折りに合う助けをお与えになるのです。

霊の体に復活なされたイエス様は、弟子たちから、また、信じる全ての者から、霊に於いて、離れられることはもう決して無いのです。それだけではなく、永遠の命の道に導き、遂には天の御国に、引き寄せ、御国に生まれさせて下さいます。このイエス様の愛と、守りと、導きは、地上の**誰も奪う事は出来ません**。ここに、**私達の存在の保証**があるのです。信仰は、誰も奪う事は出来ません。歴代のキリスト者たちは、この奪われることのない喜びに生かされて、迫害に遭っても、信仰を守り通してきました。そこには、イエス様が共におられる確かさがあり、イエス様の愛と守りを確信できたからです。

イエス様は続けて、23節に、

「その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねない。」

と言っておられます。ここでのその日は、16章13節の、

「その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。」

とある通り、イエス様のものを受けて、弟子たちに告げるお方が来られる。聖霊降臨を意味しています。

聖霊が来てくださったなら、聖霊がイエス様の御心を受けて、教えて下さるので、今までイエス様に尋ねたような質問をする必要は無くなるのです。また、イエス様の**十字架の贖い**は、人類が神様に背いて、断絶していた関係に、**道が開かれる**ことです。イエス様を通して神様との**交わりが出来る**ようになるのです。そこでイエス様は、弟子たちに、

「あなたがたがわたしの名によって、何かを父に願うならば父はお与えになる。」

と約束して下さいました。その関係に**導びかれたのは**、ひとえにイエス様が、**十字架の贖いを成し遂げて下さった**からです。それ故に、イエス様の**名を通して**、私達はどんなことも**神様に祈ることのできる特権が与えられる者**になったのです。ですから、

「願い(続け)なさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。」

とイエス様は約束して下さいました。

キリスト者にとって真の喜びはなんでしょうか。それは**私の存在を、永遠の滅びから救い出し、永遠の命を与えて下さるイエス・キリストが、共に居て、御国まで導いて下さること**ではないでしょうか。そこに、真の喜びがあり、それは誰も奪う事が出来ません。

私達もイエス・キリストを信じ従い、誰にも奪われることのない、この喜びに生かされて、イエス様に信頼し、導かれて、御国を目指して歩んでいこうではありませんか。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神様

イエス様は私達に、誰にも奪われる事無い喜びを与えるために、十字架に掛かり、贖いを成し遂げて下さいました。

この大きな愛と喜びの絶大な価値を、決して見失うことなく、イエス様を信じ従い、この喜びに生かされ、御国を目指して歩む者と成らせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。